

水口岡山城跡第3次発掘調査



写真1 天守推定地a出土の石垣

【水口岡山城の歴史】

天正13年(1585)4月、羽柴秀吉(のちの豊臣秀吉)は紀州攻めに動員した甲賀衆(中世以来、甲賀郡に在住した土豪たち)を改易(武士の身分をはく奪する)処分としました。その直後、秀吉は中村一氏を泉州岸和田から水口へ移し、大岡山(現在の古城山)に城を築かせました。それが、水口岡山城です。

一氏は、水口岡山城の城主となると同時に八幡山城(近江八幡市)を築城した秀吉の甥秀次の家老に任命されました。一氏のほか、田中吉政(八幡山城)、堀尾吉晴(佐和山城)、山内一豊(長浜城)、一柳直末(大垣城)が秀次付きの家老となっています。水口岡山城が築城された天正13年段階では秀吉に敵対する東海の徳川家康や関東の北条氏を睨み、近江国は東国制覇の重要な拠点と位置づけられていました。東海道を眼下に見据え、鈴鹿峠を望む立地にある水口岡山城は、まさに東国への足掛かりとして戦略的に重要な城のひとつだったのです。

天正18年、北条氏を倒し、天下をほぼ手中におさめた秀吉は、一氏を駿河国駿府城へ移し、増田長盛を水口岡山城の城主とします。さらに、文禄4年(1595)には長東正家を城主とします。二人とも豊臣家の五奉行のひとりでした。

しかし、慶長5年(1600)、関ヶ原の戦いの後に廃城となり、家康は水口を直轄地とします。豊臣政権の象徴であった山城は破城となります。天和2年(1682)に水口藩の成立以降は御用林となり、一般の人々の入山は禁じられました。

【出土瓦の様相】(写真4・5)

今回の調査では大量の瓦が出土していますが、AトレンチとBトレンチで出土する瓦の様相が異なります。Aトレンチでは、これまで水口岡山城で最も多く出土している巴文軒丸瓦と桔梗唐草文軒平瓦、大溝城と同範の軒丸瓦・軒平瓦が出土します。一方、Bトレンチでは宝珠唐草文軒平瓦や菊花唐草文軒平瓦など寺院から転用したとみられる瓦が出土します。



写真3 石仏の転用状況

【今回の調査でわかったこと】

1. 天守推定地a・bで構造に違い

東西両端に天守級の建物があった

推定地aは、現況の土壇の南側2/3ほどが本体部分で北東側に一部張り出し部をもつ構造でした。また、推定地bは、石階段を東側に張り出させる構造で、転用材が多く使われています。これらの成果から、二つの天守推定地はそれぞれ異なる構造の推定天守台であったと想定できます。

また、建物の構造や規模は分かりませんが、瓦が出土しているほか、礎石を検出していることから、どちらにも天守級の重層建造物があったと推定できます。羽柴(豊臣)秀吉の直臣が築城した拠点城郭として威容を誇ったことでしょう。

2. 推定地a・bで使用された瓦の違い

推定地aでは城郭用に作られた巴文軒丸瓦と桔梗唐草文軒平瓦のほか、大溝城と同範の軒丸瓦・軒平瓦が出土しました。一方、推定地bでは宝珠唐草文軒平瓦や菊花唐草文軒平瓦などの寺院から転用したとみられる瓦が一定量出土しました。推定地bでは五輪塔や石仏などの転用材がみられ、瓦のあり方と共通します。文献史料によれば、水口岡山城を築城する際に矢川寺から部材を運び込んだことが知られるほか、山中にあった大岡寺を山下に下したとも言われています。

推定地a・bで出土する瓦は、廃城後の破城に伴う埋め立て層から出土しており(写真6)、城の最終段階では推定地a・bの両方に瓦葺建物が存在した可能性を示しています。



写真4 Aトレンチ出土軒瓦 左側が大溝城と同範品



写真5 Bトレンチ出土軒瓦



写真6 石垣埋没状況

編集 甲賀市教育委員会 平成26年(2014年)11月15日発行
問い合わせ先 甲賀市教育委員会事務局 歴史文化財課
〒520-3393 滋賀県甲賀市甲南町野田810番地
電話:0748(86)8026 FAX:0748(86)8216



図1 水口岡山城跡第3次調査 調査対象地位置図 1:3,500 縄張り図は高田徹氏作成 (『甲賀市史』第7巻よりを引用)

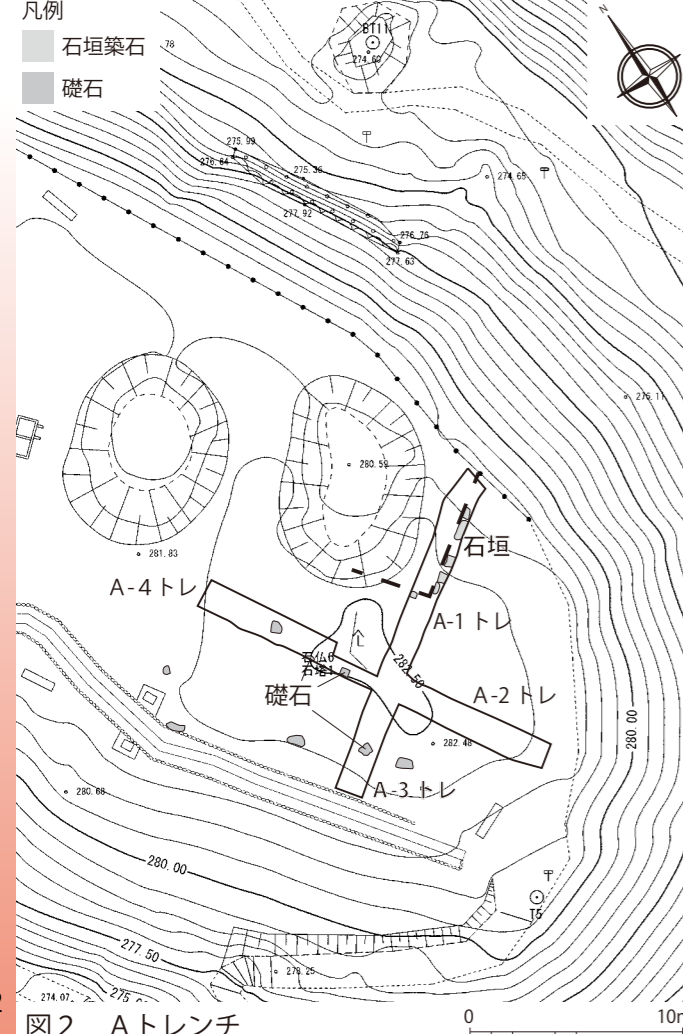


図2 Aトレンチ

【調査の位置と目的】

今回の調査は、曲輪 I (主郭部) の東端と西端にある高さ1m程度の土壇 (図1のaとb) を対象としました。江戸時代に描かれた絵図からどちらかが天守跡である可能性が高いことから、両者の構造や規模の違いなどを明らかにするために、二つの土壇に調査区を設定しました (図1のAトレンチとBトレンチ)。

【Aトレンチ】 (図2)

A-1トレ中央付近から北端にかけて石垣を確認しました (写真1)。石垣はA-1トレ中央付近でL字に折れ曲がっていました。築石は幅50~60cm、中には95cmを測る大きな石もあります。石垣は大量の瓦を含む土で埋められていました。破城によるものと考えられます。

また、礎石も確認しました。この場所に建てられた瓦葺建物の礎石とみられます。

礎石上面の高さと石垣の2段目の石の高さから石垣は2段だったと推定できます。

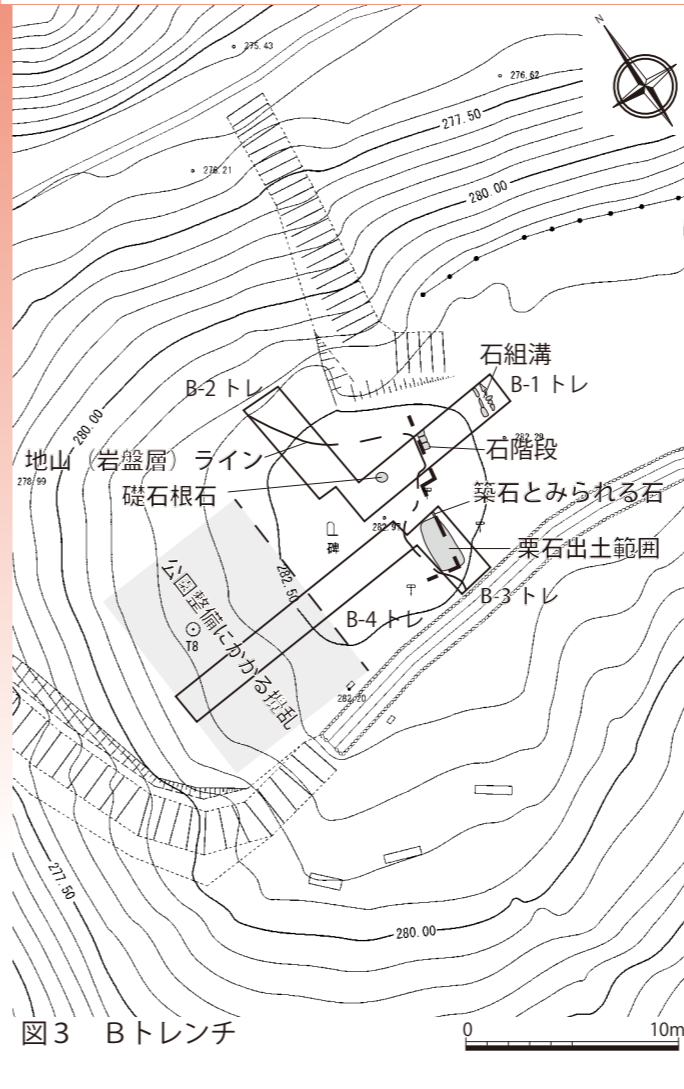


図3 Bトレンチ

【Bトレンチ】 (図3)

B-1トレの中央付近で石階段を検出しました (写真2)。一部の石は抜き取られていましたが、3段分確認できます。石材には五輪塔などが転用されています。階段1段の奥行は約30cm、1段の高さは20cm前後です。石の大きさは、転用材が31cm角、その他の石材が幅35~45cmです。

また、石階段の東側で幅30cm石組溝を1条検出しました (写真2)。排水溝の役割を担っていたと考えられます。側石の一部に石仏を転用していることが確認できます (写真3)。側石は東側列で3個、西側列で5個、一部で石が2段積み重ねられている状況が確認できます。側石の大きさは、小さいもので幅20cm程度、大きいもので幅50cm程度でした。なお、石階段と石組溝は大量の瓦を含む土で埋められていました。破城によって埋められたと考えられます。

B-3トレの北端部に築石とみられる石を検出しました。この石の背面には多くの栗石あり、石垣の基底石と考えられます。また、栗石はB-3トレの南から1/4付近より北側にのみ集中しています。その付近で大きめの石が出土したことから、石垣の隅角の可能性がります。



写真2 石階段と石組溝